「虐待の世代間連鎖」のドキュメンタリー番組を見て

増え続ける児童虐待の中でも、大きな問題となってきているのが「虐待の世代間連鎖」。
全国児童相談所長会の調査では、虐待する親の３割が幼少期に虐待を受けていたとか。

この問題を取り上げた番組「虐待カウンセリング　～作家　柳美里・500 日の記録～」を見た。
「世代間連鎖」に悩む親・２００人以上と向き合ってきた大学教授が、幼い頃から父親の暴力を受け、母親からは暴言を吐かれ心の傷を負い、その後、文学作品を書くことで心の傷も癒されたかに見えたが、１０年前に子どもが生まれてから我が子を虐待する自分に悩む作家とのカウンセリングドキュメント番組であった。

番組を見て、数年前の「虐待」を取り上げた授業の後、ある学生が「自分は親からいつも叩かれて育てられた。我が子を叩かないでしつけることは、可能なのか？」と問われたことを思い出した。
思うに、子どもは実体験、実感することから、また、「見」、「習う」ことから多くのことを身に着けていく。
学生は、自分が実体験した子育て以外に子育てのイメージがわかず、こうした質問をしてきたのだろうと思う。

まして、初めての子どもの育児過程でどう対応すればいいのか戸惑う時、自分が育てられた体験（第三者的には「虐待」と言われるものであっても）から見習ったことを無意識にしてしまうのでないだろうか。

番組でも、作家は親に育てられた辛さを思い出したくなくと、今も親に会うことすら躊躇している。
作家の父親は我が子を虐待と言われる育児をしたとは思っていないようであり、父親と父親の故郷を始めて訪ねて､親戚から父親も親から虐待を受けていたことを始めて知りる。

父親も親からの虐待の中で育ってきた一人の人間として客観視できるようになり、厳しい親というだけのイメージの呪縛から解放されたのか、我が子が思い通りにならなくても受け入れる余裕が出始めたところで番組は終わっていた。

「虐待の世代間連鎖」の問題は、親の、またその親の過去の幼い体験が根にある問題だけに、まずはどうカミングアウト（人に知られたくないことを告白すること）させて上げるかが必要で大事ということか…。

告白を傾聴するには、我々が「相手を理解するのでなく、まず相手が自分を理解者と認めてくれる関係を築くこと」を心懸けることだろうなぁ。

阿部幸泰　　（2011 年 5 月 16 日　記）